瀬峰町文化財調査報告書　第９集

泉谷遺跡

――宮城県北部における水田遺構等の調査――

平成３年３月

瀬峰町教育委員会

発　刊　の　辞

私たちの町では、以前から町内の各所に所在するいろいろな文化財に力を入れてきました。

赤松の老木であるゆるぎの松や、八幡太郎義家伝説にまつわる四ッ壇、桝形などは年間を通じてその保存と環境整備に努めているため、町の代表的な文化財として多くの町民の方々から親しまれています。

史跡の公有化にも力を入れているところです。平成２年は高清水宿と瀬嶺宿を結ぶ旧佐沼街道の道ばたに、一対となって現存する瀬峰一里塚の土地を約2,400㎡取得しました。旧状をよく保っている県内でも稀な近世交通遺構であるところから、平成２年７月31日付けで宮城県の有形文化財に指定されました。

古文書の解読調査も盛んです。昭和59年度からスタートした「よく分かる古文書講座」、平成元年１月から始められた「古文書解読会」は、いずれも町内の旧家に伝えられてきた近世文書をテキストとし、江戸時代の暮しを解明する有力な活動として着実な成果をあげています。

埋蔵文化財の方面では、がんげつ遺跡の第１次から第３次に及ぶ調査、そして長者原Ⅱ遺跡や大境山遺跡、下藤沢Ⅱ遺跡、泉谷館跡の調査など、保護と研究のために発掘を実施した遺跡は、今では十指を超えるほどになりました。

本書に収録したのは、農道建設に先がけて平成元年８月から12月にかけて発掘調査が実施された泉谷遺跡です。調査の結果、低地部からは年代は特定することはできませんでしたが、水田遺構を検出することができました。また、一段高くなった丘陵部からは多数の溝状遺構や小竪穴遺構が発見され、地域の歴史を考察する上で貴重なデータを得ることができました。調査にあたって、種々有益なご指導とご協力をくださった多くの方々に心から感謝の意を表しまして、発刊のごあいさつといたします。

平成３年３月

瀬峰町教育委員会　教育長　及川秀美

例　　言

1．本書は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書である。

〔遺　跡　名〕泉谷遺跡（遺跡登載番号：46023）

〔調査対象面積〕約3,640㎡

〔調 査 面 積〕約3,100㎡

〔調 査 期 間〕昭和63年12月１日～昭和63年12月16日　　平成元年８月28日～平成元年12月13日

〔調査主体者〕瀬峰町教育委員会　教　　育　　長：及川秀美

〔調査担当者〕瀬峰町教育委員会　主査兼社会教育主事：阿部正光

2．今回の発掘調査と報告書作成にあたり、次の機関、方々から指導、協力を得た。

宮城県教育庁文化財保護課

宮城県古川土地改良事務所

㈲ 古 環 境 研 究 所

弥生時代研究会代表：佐藤信行

河南町教育委員会　主　事：佐藤敏幸

東北陶磁文化館　学芸員：本田泰貴

瀬峰町文化財保護委員：佐々木尚見、飯塚義則、高橋正昭、小野寺靖夫

泉谷遺跡発掘調査参加者：鎌田淑男、鈴木禮志、佐々木馨、中道永治、佐々木大三郎、佐々木亀寿男、田口ミヨ、坂本はるみ、飯塚緋佐子、大内キミ小野寺きよえ、坂本和枝、矢吹美智子

3．土層や土器の色調表記については『新版標準土色帳』四版（小山・竹原：1973.1、日本色研事業株式会社）に準処し、土性区分については国際土壌学会法の基準を参考にした。

4．調査によって得られた資料は、全て、瀬峰町教育委員会で保管している。

5．本書の執筆・編集は瀬峰町教育委員会社会教育課　主査兼社会教育主事　阿部正光が行った。

目　　次

発　刊　の　辞
例　　言
目　　次
Ⅰ．遺跡の位置と地理的・歴史的環境……1
1．遺跡の位置と地理的環境……1
2．遺跡の歴史的環境……1
Ⅱ．調査経過……11
1．調査に至る経過……11
2．基本層序……13
Ⅲ．検出された遺構と遺物……13
1．沖積低地部から検出された遺構と遺物……13
2．丘陵部第１地区から検出された遺構と遺物……13
3．丘陵部第２地区から検出された遺構と遺物……13
4．丘陵部第３地区から検出された遺構と遺物……15
5．丘陵部第４地区から検出された遺構と遺物……16
6．まとめ……16
（付篇）泉谷遺跡におけるプラント・オパール分析……26
図　　版

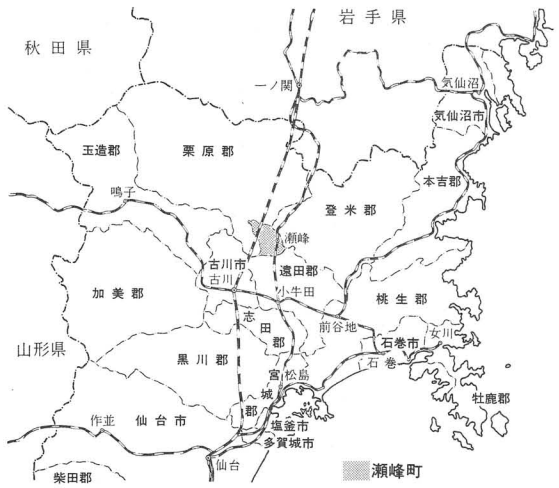
Ⅰ．遺跡の位置と地理的・歴史的環境

1．遺跡の位置と地理的環境

宮城県の北西部に位置する栗原郡は岩手、秋田両県と境を接している。瀬峰町はその栗原郡の中でも東南端に所在し、宮城県西部を南北に貫く奥羽山脈と、岩手県から宮城県北東部にかけてのびる北上高地とに狭まれた仙北平野低地帯のうち、北上川流域右岸の一画に位置している。

ここは奥羽山脈から次第に標高を減じながら南東方向に連なる派生低丘陵のほぼ末端部分に当たり、周辺には県北湖沼地帯として知られる伊豆沼、内沼、長沼、蕪栗沼が群在する。中でも、蕪栗沼はかつて当湖沼地帯最大の水域を有していたが、江戸時代の新田開発、さらには近年の排水・開田事業によって、現在ではその旧状をほとんど止めていないものの、瀬峰町を貫流する瀬峰川、小山田川、大水門川、萱刈川の遊水池として、当町の東南部に隣接しているものである。

泉谷遺跡は、ＪＲ東北本線瀬峰駅の南方約2.3km、瀬峰町を東西に横切る緩やかで低平な四つの丘陵中、瀬峰町と田尻町境を流れる萱刈川と町南部を東流する大水門川とに狭まれた通称、四ッ壇原丘陵の東端部に位置している。標高20ｍ前後の遺跡からは宮城県北湖沼地帯の一画、旧蕪栗沼低地帯を眼下に望むことができる。



第１図 瀬峰町位置図

本遺跡の基盤は礫岩、砂岩、泥岩、凝灰岩からなる鮮新統瀬峰層で、その上には礫岩と凝灰岩から構成される更新統高清水層、さらに最上部には第四系中里火山灰が堆積しており、丘陵上に所在する町内の諸遺跡とほぼ同じ様相を呈している。

2．遺跡の歴史的環境

本項での記述は主に瀬峰町に限定したが、より広い地域で考えなければならない点について

は、隣接地域の資料も用いた。また、記述を進めるにあたっては多数の文献を参考にしたが、一つひとつ明記すると文章が極めて煩雑になるところから、従来までの町内の成果が収録されている「宮城県遺跡地図」（宮城県教育委員会：1981.1）を基本とし、それに収録されていない成果は文献名や註を文中に付し、説明を加えた。

旧石器時代

近年、宮城県内では旧石器時代の遺跡の発見が相次いでいるが、瀬峰町内においては未発見である。しかし、宮城県北部旧石器時代遺跡群から至近であること、当町の丘陵には厚い火山灰の堆積が認められることなどから、近い将来、町内からも旧石器時代の遺跡が発見される可能性が高い。

縄文時代

瀬峰町内において、縄文時代の遺物を出土する遺跡は19ヶ所を数えるが、その年代を特定できる遺跡は７ヶ所と極く少ない。

早期、前期の遺跡としては、条痕文土器の細片を出土するところから縄文時代早期後葉と考えられる大鰐谷遺跡[註1]、早期後葉から前期前葉の繊維土器を出土する大境山遺跡が、この時期でも古い段階の遺跡として確認されている。これらに後続する遺跡としては、前期大木４式を出土する筒ヶ崎遺跡、大木６式を出土する大境山遺跡、空堤遺跡、岩石Ⅰ遺跡が知られている。

中期では大木8a式が岩石Ⅰ遺跡、大木8b式が大境山遺跡、大木10式が岩石Ⅱ遺跡（阿部・赤沢：1985.3）から出土している。

後期では門前式が大境山遺跡から、また、南境式が大鰐谷北向遺跡から出土している。

晩期の遺跡は今のところ、知られていない。

以上、時期の分かる遺跡を列挙したが、これらは全て丘陵上に位置している。時期不明の遺跡についても同様である。また、土器の出土が極めて散発的で、しかも、細破片が少量しか発見されないというのが現状である。今後、調査が進むと遺跡の数は増加するものと予想されるが、現時点では、当町域における縄文時代の遺跡のあり方は貧弱であると指摘せざるを得ない。なお、その理由について現段階では、「縄文時代において当町域は概ね、蕪栗沼沿岸諸遺跡の後背地としてその生活領域内に包含され、活動の拠点となる集落の形成はなされず、むしろ、これらと諸遺跡の生産活動を補完する狩猟、採集の場として機能していた」（阿部・赤沢：1985.3）と考えられている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は３ヶ所、確認されているに過ぎない。

発掘調査の実施された大境山遺跡では、極く少量の円田式と多量の天王山式系の土器、それに数点のアメリカ式石鏃が出土した。主に、標高30数ｍの丘陵頂部平坦面から出土したが、約35,000ｍにもおよぶ調査区域内からは、この時期の遺構は全く検出することができなかった。岩石Ⅰ遺跡においては、その西北端、標高50数ｍの丘陵頂部平坦面から少量の天王山式系土器が採集されている（阿部・赤沢：1985.3）。標高30ｍ前後の寺山遺跡では、天王山式に後続する弥生時代後期最終末段階の土器が１個体出土しているが[註2]、出土状況の詳細は不明である。

これらの３遺跡は、いずれも瀬峰川と小山田川に挟まれた寺沢丘陵に立地するものであるが、他の丘陵上からは未だ発見されていない。このような状況を考えると、当町域の弥生時代の様相は今のところ、ほとんど不明であると言わざるを得ないのが現状である。

古　墳　時　代

瀬峰町内で発見されている古墳時代の遺跡は６ヶ所であるが、前期の遺跡としては大境山遺跡と泉谷遺跡が知られている。寺沢丘陵に立地する大境山遺跡では、標高35ｍ前後の丘陵頂部平坦面上に11基の住居跡が近接して発見されている。住居跡の大部分は、一辺４ｍ以下、平面形は歪みのある方形、または長方形を呈する。塩釜式期の土師器の坏や高坏、甕、壺、土製紡錘車、砥石、黒耀石製ラウンド・スクレーパーなどが出土しており、住居跡数基を単位とする小集団の様子を具体的に知ることができるものである。泉谷遺跡においても、塩釜式期の土師器高坏、器台、黒耀石製スクレーパーが採集されているが、蕪栗沼に半島上に突出する標高20ｍ弱の丘陵上に位置するところから、当時の生業や領域を考える上で特筆される遺跡でもある。

中期の遺跡としては荒町遺跡が知られている。小山田川の南岸、標高20ｍ前後のなだらかな丘陵上に位置するものであるが、南小泉式期の高坏が発見されているだけで、その詳細は不明である。

後期の遺跡としては泉谷館跡、民生病院裏遺跡、三代遺跡が知られていれが、いずれも標高20ｍ～30ｍ前後の丘陵上に位置するものである。

昭和61、62年度の２ヶ年にわたって調査が実施された泉谷館跡（阿部・赤沢・佐藤：1987.3）からは、11基の住居跡が検出され、栗囲式期の土器とそれにほぼ併行すると考えられる関東地方鬼高式期の土器が出土している。ちなみに、近年、仙台市郡山遺跡（木村・長島：1983.3ほか）、古川市名生館遺跡（白鳥・後藤：1985.3ほか）、志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川：1982.3）などでは、７世紀後半から８世紀前半にかけての関東系の土器が相次いで出土しているが、泉谷館跡出土の関東系土器の年代は概ね、７世紀前半と考えられ、それらに先行する段階のものとして注目を集めている。

同種の関東系土器は、出土状況が明確ではないものの、民生病院裏遺跡（1984.3：阿部・佐藤）からも出土している。

三代遺跡からは、栗囲式の中でも新しい段階に属する一括資料が得られている。

以上、古墳時代の遺跡の概要を述べたが、いずれも蕪栗沼、もしくは、それに流入する小山田川を間近かに望める丘陵上に位置している。よって、当時、既に小山田川の土砂運搬作用によって徐々に沖積地化しつつあった旧蕪栗沼縁辺部において、遺跡ごとに水田経営が展開されていたと推定されるが、今後は、各遺跡の編年とその関連を、より詳細に究明することも必要と思われる。なお、関東系土器に象徴される関東地方との交流経路については、当町が海岸部から離れた内陸部に位置するものの、舟を用いて北上川、迫川を溯れば容易に宮城県北部湖沼地帯の一つ、旧蕪栗沼に到達しうるという地理的条件を備えているところから、陸路のほかに海路の存在も考えてゆく必要があろう。

奈　良・平　安　時　代

瀬峰町内で遺跡の数が最も多く確認されているのは、奈良・平安時代の遺跡である。現在までのところ49遺跡を数えることができるが、集落跡としての岩石Ⅰ遺跡（阿部・赤沢：1985.3ほか）、長者原Ⅱ遺跡[註3]、大境山遺跡、下藤沢Ⅱ遺跡（阿部・赤沢・佐藤：1988.3）、民生病院裏遺跡、清水山Ⅰ遺跡（阿部・赤沢・佐藤：1987.3）については発掘調査が実施されている。

岩石Ⅰ遺跡は標高30ｍ～50余ｍの丘陵奥部に位置する遺跡で、３次にわたる調査で住居跡が５基、掘立柱建物跡が１棟検出されている。

長者原Ⅱ遺跡、大境山遺跡、下藤沢Ⅱ遺跡、民生病院裏遺跡、清水山Ⅰ遺跡はいずれも標高30ｍ前後の丘陵上に立地する遺跡である。２度にわたって発掘調査を実施した長者原Ⅱ遺跡からは、合計12基の住居跡と、２棟の掘立柱建物跡が検出されている。このうち、掘立柱建物跡に近接し、しかも、最も大きい住居跡からは須恵器の坏・蓋類が20数点、さらには須恵器大甕や円面硯も出土していることから、集落内における住居の性格を考える上で好資料が得られている。

２ヶ年にわたって、35,000㎡の全面調査を行った大境山遺跡からは、23基の住居跡と２棟の掘立柱建物跡、それに極めて多量の遺物が発見されている。特筆されるのは、これらの住居跡が適度に散在する現象が顕著に認められたことで、集落内で住居跡がこのように散在する現象は岩石Ⅰ遺跡、長者原Ⅱ遺跡にも見い出すことができる。恐らく、宮城県北部における集落構成の一タイプとして描出されるものであろう。なお、大境山遺跡からは住居跡の周囲に半円形または弧状にめぐらされた溝（外周溝）、住居跡内から外に向ってのびる溝（外延溝）が付設された住居跡が多数検出されたが、その機能を初めて明らかにし得た遺跡としても知られている。

下藤沢Ⅱ遺跡、民生病院裏遺跡、清水山Ⅰ遺跡からは奈良時代の住居跡が合計４基、さらに、多数の遺物も伴出しており、当核期の具体的様相を考える上で貴重な資料を提供している。

以上、発掘調査が実施された遺跡に限ってその概要を記したが、これらの成果だけでは、当地域における奈良・平安時代の集落構造や急激な遺跡数増大の背景など、当時の社会的・経済的背景にまで到底、論及できるものではない。今後とも、数多くの集落跡について、継続的な発掘調査を実施し、基礎的なデータを蓄積してゆかなければならないと考えられる。

一方、集落跡以外の遺跡はほとんど確認されておらず、奈良時代と考えられる蔵骨器が出土した蒲盛遺跡が墓制に関する遺跡として、唯一、知られているに過ぎない。今後は窯跡や製鉄、水田や畑など、生産に関する遺跡や、経塚など宗教に関する遺跡等についても、意識的、かつ多面的な調査活動を実施する必要に迫まられている。

中　　世

中世の館跡として、確実なものとしては藤沢館跡、古館館跡、殿上館跡、小深沢殿上館跡があげられる。いずれも瀬峰川に面する丘陵上に形成され、自然地形を利用した空掘りや土塁で区画された単郭式の小規模なもので、眼前には狭小な沖積低地を望むことができる。

集落跡の正式な調査例はないが、小山田川によって形成された標高６ｍ前後の河岸段丘に立地する下富前遺跡からは、14世紀初め頃の龍泉窯青磁皿の破片が採集されており、蕪栗沼に面する中世遺跡として知られている。小山田川の南岸、丘陵上に展開する荒町遺跡からは14世紀初め頃の古瀬戸壺の肩部破片、16世紀代の瀬戸、もしくは美濃と考えられる灰釉皿の口縁・体部破片が出土しており、下富前遺跡と同様、良好な中世遺跡としてその解明が期待されている。

中世の所産と考えられる塚は、現在までのところ、３ヶ所知られている。寺沢丘陵の西部、標高60余ｍの丘陵頂部に位置する経壇遺跡は７基の塚から構成されるが、そのうち１基からは銅製経筒が出土したと伝えられているところから、平安時代末期から中世にかけての経塚と推定されている。泉谷館跡（阿部・赤沢・佐藤：1987.3）からは東西14ｍ、南北15ｍの方形にめぐる溝が検出されたが、堆積土の状況から、溝で囲まれた空間には当初、マウンドがあったと推定されている。青磁大形花瓶の体部破片、築館町熊狩窯（工藤・藤沼ほか：1979.3）製品と思われる甕の口縁部、体部破片の出土から、鎌倉時代中期から後期にかけての宗教的な壇であると考えられている。寺沢遺跡からは昭和56年度、草地造成の際、強い火熱によって複雑に変形した鎌倉時代の和鏡が、削平された塚の基底部から焼土と共に出土している。

板碑については大正年間、20数基あることが知られていた（鈴木玄雄：1922.12）が、近年、破損したり、または所在不明になるものもあり、現在では17基確認されているに過ぎない。石に刻まれた中世文書とも言うべき資料であり、早急な保護策を講じる必要がある。

近　　世

現在の瀬峰町は、近世においては奥州仙台領栗原郡の藤沢村、富村、中村に分かれていた。藤沢村には、栗原郡と登米郡を結ぶ佐沼街道（佐沼・登米道：高清水宿～佐沼宿～登米宿）の宿駅、瀬嶺宿が設置され、人馬の往来で大いに賑わったという。この瀬嶺宿の西方、約2.5㎞、藤沢村の寺沢地内と富村の北ノ沢地内を横切る佐沼街道には、道をはさんで一対の一里塚が保存されている。明治以降、道路の拡張によって大多数が破壊されたため、一対となって残る例は極めて少なく、交通史上、貴重な遺構である。

中村の泉谷地区には、仙台藩士、橋本氏（知行高80貫380文）の在郷屋敷がある。昭和61年度、62年度にかけて発掘調査が行われ、数棟の掘立柱建物跡や西門跡、塀跡などが検出された（阿部・赤沢・佐藤：1987.3）。17世紀中頃以降、泉谷地区の新田開発の拠点として造営されたもので、その周囲には家中屋敷が均等に分与されている。

中村の荒町地区には、除（のぞき）と呼ばれる所がある。仙台藩士、蟻坂氏の在郷屋敷で、寛永21年（1644年）、所替となるまで居住したと伝えられている。遺跡の保存状況も良好なところから、発掘調査を実施すれば、泉谷地区の橋本氏屋敷跡と同様、近世初期の在郷屋敷が姿を現わすものと思われる。

町内には多数の塚が知られているが、確実に江戸時代と分かるものとしては、先述した佐沼街道一里塚、元文年間、虎渓寺家山和尚が中村の安全を祈願して、経文を書き写した石を埋納したと伝えられる諏訪原経塚、それに、発掘調査によって盛土を伴う墓であることが確かめられた下藤沢Ⅱ遺跡の塚群をあげることができるだけで、その大部分の所属年代は未だに明らかにされていない。今後、詳細な分布調査や踏査、発掘調査などを通して年代や性格の確定に努めなくてはならない。

近年、町内各地の旧家から続々と近世文書の発見が相次いでいる。現在は、それを解読する講座（葛城・佐々木・佐々木・阿部：1987.3ほか）や作業が着々と推し進められているが、今後は、それらを地域全体の文化財として正しく位置づけ、近世史を編纂する基本資料とするために、本格的に取り組まなければならないと考えられる。なお、講中供養碑などの石造物については、昭和55年度から拓本悉皆調査を継続的に実施しており、近世における民衆の信仰生活の実態が徐々に明らかにされてきている（佐々木・阿部・赤沢・佐藤：1987.3ほか）。

註１：昭和61年11月、文化財パトロールの際、発見された遺跡である。

註２：昭和49年３月、土地所有者、青沼弘氏によって採集されている。

註３：昭和63年９月から10月にかけて第２次調査が実施された。

註４：昭和62年10月、現地を調査した結果、道の両側に２基の塚（高さ約1.8ｍ、基底部直径約９ｍの円形　塚

頂部中心での距離約19ｍ）を確認し、さらに、宮城県立図書館蔵『仙台藩領内図』（万治・寛文・延宝年間）、『栗原郡登米郡御郡司方ゟ相出候扱切絵図』（元禄15年正月）、『御領内道程絵図』（元禄15年３月）にも、同所附近に一里塚の記載があることから、一里塚と断定して間違いない。平成２年７月31日付け、宮城県指定史跡に指定された。

第２図　寺沢遺跡から出土した和鏡

0　5cm

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	王壇遺跡	塚、包含地	奈良・平安、中世(?)	37	八幡前遺跡	塚	中世・近世
2	四ッ壇遺跡	塚、包含地	奈良・平安、中世(?)	38	長者原Ⅱ遺跡	集落跡	奈良・平安
3	桝形館跡	包含地、城館	縄文、奈良・平安、中世	39	一本松遺跡	包含地	奈良・平安
4	四ッ塚遺跡	塚	平安(?)	40	大境山遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳、奈良・平安
5	伊勢堂館跡	包含地、塚、城館	縄文、奈良・平安、中世	41	清水沢Ⅰ遺跡	包含地	中世・近世
6	藤沢館跡	城館	中世	42	坂ノ下浦Ⅱ遺跡	包含地	奈良・平安
7	殿上館跡	城館	縄文、中世	43	清水沢Ⅱ遺跡	塚	中世・近世
8	経壇遺跡	経塚	中世	44	町田遺跡	包含地	奈良・平安
9	小深沢殿上館跡	城館	中世	45	薬沢東遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
10	館山館跡	包含地、城館	縄文、奈良・平安、中世	46	桃生田前遺跡	集落跡	奈良・平安、中世・近世
11	的場山遺跡	包含地	縄文、奈良・平安	47	下富前遺跡	包含地	奈良・平安、中世
12	古館館跡	城館	中世	48	伯耆ヶ崎遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
13	大鰐谷北向遺跡	包含地	縄文(後)	49	中三代遺跡	集落跡	奈良・平安
14	空堤遺跡	包含地	縄文(前)	50	長根遺跡	包含地	奈良・平安
15	寺山遺跡	包含地、寺院跡(?)	弥生、平安(?)	51	諏訪神社遺跡	包含地	縄文、奈良・平安
16	砂田遺跡	包含地	奈良・平安	52	諏訪原経塚	経塚	近世
17	岩石Ⅰ遺跡	集落跡、塚	縄文(前・中)、弥生、古墳、奈良・平安、中世・近世	53	鼻欠遺跡	包含地、塚	縄文、奈良・平安
18	下山遺跡	包含地	奈良・平安	54	野沢遺跡	包含地	奈良・平安
19	三代遺跡	包含地	古墳、奈良・平安	55	袋沢遺跡	包含地	奈良・平安
20	荒町遺跡	包含地	縄文、古墳、奈良・平安、中世	56	五輪堂山遺跡	集落跡	奈良・平安
21	四ッ壇原遺跡	包含地、塚	奈良・平安、近世	57	小深沢Ⅰ遺跡	集落跡	奈良・平安
22	筒ヶ崎遺跡	包含地	縄文(前)、奈良・平安	58	小深沢Ⅱ遺跡	集落跡	奈良・平安
23	**泉谷遺跡**	**包含地**	**縄文、古墳、奈良・平安**	59	横森遺跡	包含地	奈良・平安
24	長者原Ⅰ遺跡	包含地	奈良・平安	60	ホイト塚遺跡	塚	中世・近世
25	下藤沢Ⅱ遺跡	集落跡、塚	奈良・平安、近世	61	北ノ沢遺跡	包含地	奈良・平安
26	杉ノ壇遺跡	塚	中世・近世	62	清水山Ⅱ遺跡	塚	中世・近世
27	下藤沢Ⅲ遺跡	包含地、塚	奈良・平安、中世・近世	63	神田遺跡	集落跡	奈良・平安
28	泉谷館跡	集落跡、塚、城館	古墳、中世・近世	64	岩石Ⅱ遺跡	包含地	縄文(中)
29	除館跡	城館	近世	65	寺沢遺跡	集落跡、塚	奈良・平安、中世・近世
30	旗塚遺跡	包含地、塚	奈良・平安、中世・近世	66	蒲盛遺跡	火葬墓	奈良・平安
31	古塚遺跡	塚	中世・近世	67	寺浦遺跡	包含地	縄文
32	清水山Ⅰ遺跡	集落跡	奈良・平安	68	清林壇遺跡	塚	近世・近代
33	下藤沢Ⅰ遺跡	集落跡	奈良・平安	69	大鰐谷遺跡	包含地	縄文
34	坂ノ下浦Ⅰ遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	70	桃生田遺跡	包含地	奈良・平安
35	二ッ谷遺跡	集落跡	奈良・平安	71	瀬峰一里塚	塚	近世
36	民生病院裏遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	72			

第１表 瀬峰町の遺跡（地名表）

蟹沢
蟹沢東
牧場
小深沢
重堰
小山田
水町
中里
瀬峰町
瀬山崎
大崎谷
西原
中畑沢
寺沢
佐野
高清水町
陸羽
新幹線
立街道
上新田
荒満寺
外沢田
上沢田
野沢
古川市
北水路
須賀
大嶺
木戸浦遺跡
川前
牛渕
渡
瀬峰
大里
下荒町
長根
原田
壱刈
壱刈川
井満
東北
太
熊狩
丁木田
蟹沢
小深沢
重堰
小山田
水町
中里
瀬峰町
瀬山崎
大崎谷
西原
中畑沢
寺沢
佐野
高清水町
陸羽
新幹線
立街道
上新田
荒満寺
外沢田
上沢田
野沢
古川市
北水路
須賀
大嶺
木戸浦遺跡
川前
牛渕
渡
瀬峰
大里
下荒町
長根
原田
壱刈
壱刈川
井満
東北
太
熊狩
丁木田

迫町
新田
南方町
大平
南方町
新町田
下山田地
寺表田
宮小路原
長者原
沼崎前
藤田
泉谷
新野谷地
大塚
太田
駒林
中沖
山田川
(国土地理院 1：25,000「高清水」「築館」を複製)

第3図　瀬峰町の遺跡

II．調　査　経　過

1．調査に至る経過

四ッ壇原丘陵の最東端部に位置する泉谷遺跡は、その大部分が水田や畑地として利用されており、遺跡の保存状況は比較的良好である。未だ、発掘調査は実施されたことはなかったものの、度重なる文化財パトロールによって一定の成果が得られている。即ち、昭和51年度文化財パトロールでは、奈良、平安時代の須恵器に加えて古墳時代前期、塩釜式期に所属する高坏と器台が、それぞれ1点ずつ採集されている（佐藤信行：1976.12、阿部・赤沢：1983.3）。

また、昭和58年度実施の文化財パトロールにおいては、古墳時代前期の塩釜式期から中期の南小泉式期にかけての土師器片、及び塩釜式期に比定されている大境山遺跡9号住居跡から出土した黒耀石製スクレーパーに石質が酷似するスクレーパーも1点採集されている（佐藤信行：1984.3）。なお、この時には、地権者、飯塚義則氏が本遺跡で採集した有柄石鏃2点、石匙1点も実見している。

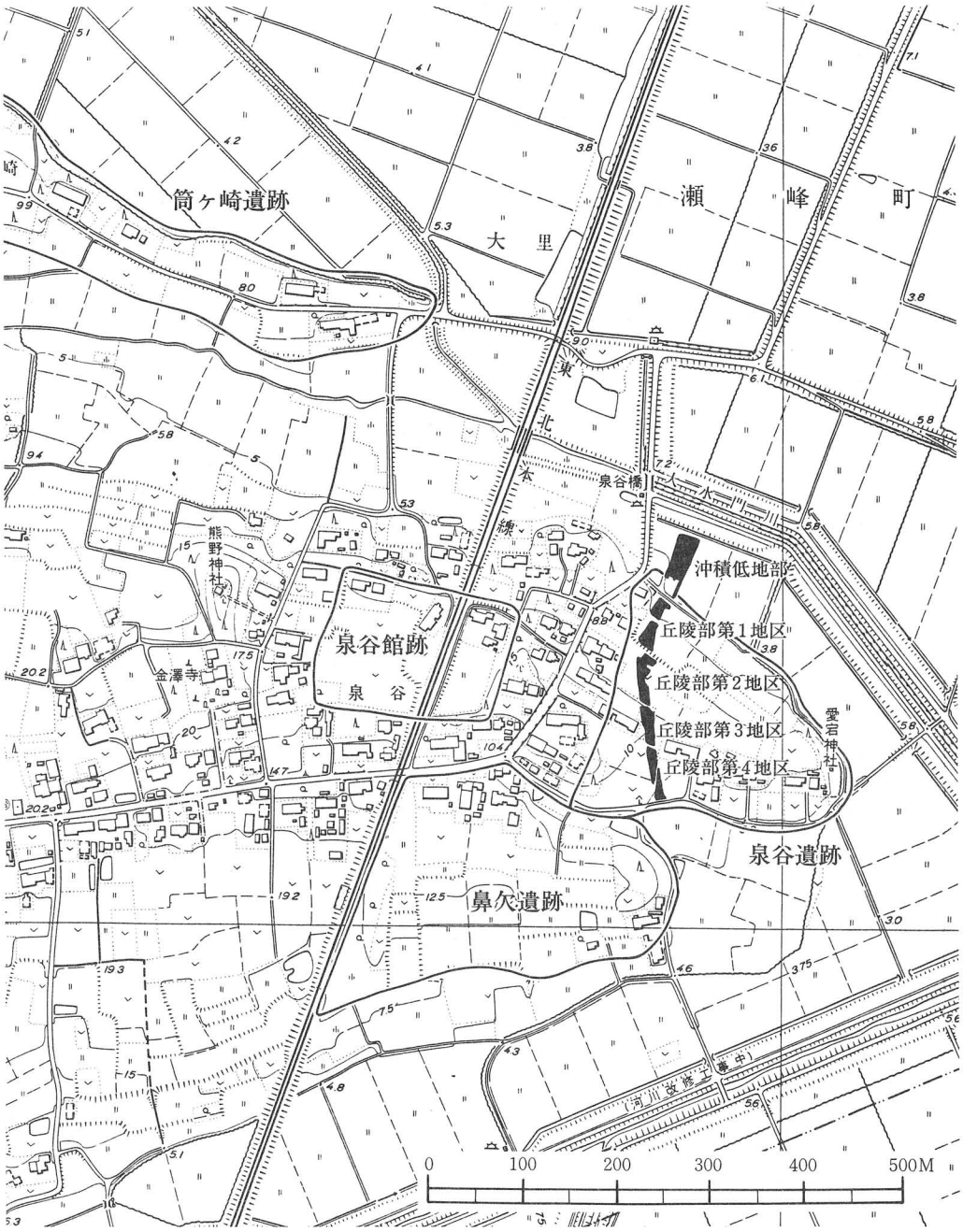
昭和63年1月、瀬峰町教育委員会に宮城県古川土地改良事務所から泉谷遺跡の最西端を南北に貫く農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の計画があるとの連絡があった。瀬峰町教育委員会では早速、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県農政部農地開発課に連絡を取り、同事務所を交えて協議を行ったところ、計画どおり工事を進めるか否か、判断の基準を求めるためには、先ず最初に農道建設予定地の現況を実地踏査によって把握することが必要と判断され、その実施時期を同年春とすることにした。

4月、文化財保護課、古川土地改良事務所、瀬峰町教育委員会合同での現地踏査が実施された。その結果、今回の農道建設予定地からは若干量の土師器や須恵器の破片が採集され、かつ、予定地の東隣接地、遺跡の所在する丘陵頂部平坦面からは竪穴住居跡と思われる灰白色火山灰が堆積する落ち込みが2基確認されたため、とりあえず農道建設予定地内の遺構確認調査を実施することとした。また、遺跡の北側に位置する現水田域（沖積低地）においても古代以降の水田遺構の存在が予想されたため、これも合わせて確認調査をすることとした。

これを受けて、ユンボを用いて表土を剥離して各種の遺構の有無を確認する調査を実施したところ、丘陵部からは14条の溝状遺構が、また、現水田域からは稲作が行われていた可能性が高いと考えられる土層が検出されたため、両地区ともに、本格的な発掘調査を行うことが必要と判断されるに至った。

発掘調査は翌平成元年8月末から開始された。調査区は沖積低地部（現水田域）の地区と、丘陵部の第1地区から第4地区、合計5地区において実施された。例年にない長雨のため、調

査は度々中断し、当初、計画した進展状況ではなかったものの、同年12月中頃までに各種遺構の精査、並びに実測、写真撮影等の記録化を全て完了し、発掘調査を終えることができた。最終的に検出された遺構としては、沖積低地部では水田遺構１枚、丘陵部の第１～第４地区においては溝状遺構16条、小竪穴遺構６基である。



第４図　泉谷遺跡における各調査区

2．基本層序

沖積低地部を除く丘綾部第１地区から第４地区の基本層序は、Ⅰ層からⅢ層に区分される。

Ⅰ層は暗褐（7.5YR3/3）色砂質シルト層で、層厚は0.20ｍ前後、軟らかく、粘性に欠ける。草木痕や耕作によって撹乱されており、土師器、須恵器、陶磁器等の破片を出土する。本遺跡の表土である。

Ⅱ層は黒褐（7.5YR2/2）色砂質シルト層で、層厚は0.20～0.40ｍ前後、やや固く、粘性に欠ける。遺物は認められなかった。

Ⅲ層はにぶい黄橙（10YR6/3）色砂質粘土で、固く粘性に富む。中里火山灰と呼ばれ、本遺跡の地山を形成する層である。

Ⅲ．検出された遺構と遺物

1．沖積低地部から検出された遺構と遺物

水田跡（第6図・第7図）

沖積低地部から検出された遺構としては、調査区の中央に帯状に分析する３層内で確認された水田跡がある。２層を剥離している際、３層上面から畦畔が確認され、水田跡の存在に気づいた。

畦畔の方向は磁北よりも11度ほど西に傾いている。畦畔は各所で途切れているが、これが廃棄時の姿を保っているか否かは不明である。幅は一定しないが、1.00ｍ前後、高さは0.20～0.30ｍ前後である。田面は3層分布の南端から北端にかけて、数cmの範囲内で傾斜している。遺物が出土しなかったため、水田跡の年代を明らかにすることはできなかった。

なお、本調査区の東壁より２地点（A地点：１層～４層で８試料、B地点：１層～２層で３試料）で試料の採取をした。その結果を本書に付篇として収録してある。

2．丘陵部第１地区から検出された遺構と遺物

１号溝状遺構（第８図・第17図）

標高約５ｍの丘陵縁辺部に沿って、北西から南東方向に延びる溝である。幅は北西部が最も広くて2.18ｍ、南東部では0.50ｍと狭くなる。深さは0.40ｍ前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは北東部が高く、南東部になるにつれて低くなる。堆積土は４層に細分される。

3．丘陵部第２地区から検出された遺構と遺物

１号小竪穴遺構（第９図・第12図・第18図）

北西部分には後からの撹乱が認られる。長軸0.70ｍ、短軸0.56ｍ、隅丸方形を呈する。壁は急な角度で立ち上がり、深さは0.13ｍを計る。底面は凹凸がなく、平坦である。堆積土は２層に細分される。No.１からは19世紀後半と思われる型紙絵付による磁器碗の極小破片が出土した。

２号小竪穴遺構（第9図・第12図・第19図）

３号小竪穴遺構を切って構築されている。長軸0.70ｍ、短軸0.61ｍ、隅丸方形を呈する。南東壁には板が付着しており、このことから本小竪穴遺構の壁は本来、板材をもって構成されていた可能性がある。底面は凹凸がなく、平坦である。堆積土は4層に細分される。層No.１から20世紀前後頃と推定される銅板絵付磁器小皿の小破片（図版５下段右中央）が出土している。

３号小竪穴遺構（第９図・第12図・第19図）

北西部分を２号小竪穴遺構に切られている。据え風呂を設置した竪穴部と隅丸方形を基調とする掘り方部から構成される。竪穴部は長軸0.82ｍ、竹箍を２段３重に巡らした木製の据え風呂で、内部の堆積土は３層に細分され。掘り方部は比較的急な角度で立ち上がり、深さ0.46ｍを計る。据え風呂設置のための層No.５と、その周辺を固定する層No.４とに分けられる。層No.１からクルミの殻が出土している。

２号溝状遺構（第９図・第20図）

南西から北東方向に延びる溝で、幅は最大で0.75ｍを計る。深さは0.10ｍ前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは南西部が高く、北東部になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は１層しか認められない。

３号溝状遺構（第９図・第21図）

北西部から南東方向に延びる溝で、幅は最大1.20ｍを計る。深さは0.30ｍ前後、断面はV字形を呈する。底面レベルは北西部が高く、南東部になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は３層に細分される。層No.１から19世紀代に属すると考えられる切込焼唐草文鉢破片（図版５上段右）、在地産擂鉢破片（図版５下段右上）等が出土している。

４号溝状遺構（第９図・第22図）

北西から南東方向に延びる溝で、幅は最大1.60ｍを計る。深さは0.20ｍ前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは北西部が高く、南東部になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は２層に細分される。

５号溝状遺構（第９図・第23図）

北西から南東方向に延びる３条の溝を本遺構とした。幅は概ね2.50ｍ、深さは0.15ｍ前後、

断面は皿状を呈する。底面レベルは北西部が高く、南東部になるにつれて低くなる。堆積土は1層しか認められない。底面から煙管の吸い口が出土した。

15号溝状遺構（第9図・第24図）

北西から南東方向に伸びる溝で、幅は最大で0.72mを計る。深さは0.20m前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは北西部が高く、南東部になるにつれて低くなる。堆積土は2層に細分される。

4．丘陵部第3地区から検出された遺構と遺物

4号小竪穴遺構（第10図・第13図・第25図）

長軸1.48m、短軸0.86m、隅丸長方形を呈する。壁はやや急な角度で立ち上がり、深さ0.40mを計る。底面は凹凸がなく、平坦である。堆積土は4層に細分される。底面から六道銭と考えられる古寛永が13枚（6枚、4枚、3枚が一塊りになっていた）と、煙管の羅宇が出土した。

6号溝状遺構（第10図・第15図・第26図・第27図）

北西から南東方向に延びて、7号溝状遺構に連結する溝である。最大幅1.50m、深さは0.15m前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは北西部が高く、北東部になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は2層に細分される。

なお、本遺構が南東端で7号溝状遺構と連結する部分に、付属ピットが検出された。長軸1.62m、短軸1.20m、長円形を呈する。壁は緩やかな角度で立ち上がり、深さ0.32mを計る。堆積土は3層に細分され、底面から砂岩製不定形砥石（図版5下段左）が出土した。

7号溝状遺構（第10図・第28図）

南西から北東に延びる溝で、幅は最大1.00m、深さは0.20m前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは南西部が高く、北東部になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は2層に細分される。なお、本遺構は南西部で8号溝状遺構と重複しているが、時間的にそれよりも新しい。

8号溝状遺構（第10図・第29図）

西から東方向に延びる溝で、7号溝状に切られ、同時期存在の9号溝状遺構に連結する。最大幅1.20m、深さは0.10m前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは西部が高く、東部になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は2層に細分される。

9号溝状遺構（第10図・第30図）

南西から北東方向に延びる溝で、その中間で8号溝状遺構と交差するが、時間的先後関係は認められなかった。幅大幅3.70m、断面は皿状を呈する。底面レベルは南西部が高く、北東部になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は2層に細分される。層No.1から須恵器甕の体部破片と、砂岩製の不定形砥石破片（図版5下段中央）が出土している。

10号A溝状遺構・10号B溝状遺構（第10図・第31図）

南西から北東方向に延びる溝で、10号A溝状遺構が時間的に先行し、10号B溝状遺構がこれに後続する。10号A溝状遺構は最大幅2.00m、断面は皿状を呈する。10号B溝状遺構は最大幅1.90m、断面はU字形を呈する。底面レベルは両溝とも南西部が高く、北東部になるにつれて徐々に低くなる。堆積土はいずれも２層に細分される。層No.は特定できなかったが、10号A、10号B溝状遺構から、20世紀前後頃の銅板絵付磁器破片（図版５下段右下）などが出土した。

11号溝状遺構（第10図・第32図）

北西から南東方向に延びる溝で、幅が最大で1.50m、深さは0.20m前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは北西部が高く、南東部なるにつれて徐々に低くなる。底面からは長軸0.40m、短軸0.20m、深さ0.05m前後の長円形のピットが約0.70～0.80mの間隔で、列状に検出された。

なお、本溝状遺構の底面からは、18世紀前半頃の肥前皿破片（図版５上段中央）が出土した。

5. 丘陵部第４地区から検出された遺構と遺物

５号小竪穴遺構（第11図・第16図・第33図）

直径0.58mの円形を呈する。壁は急な角度で立ち上がり、深さは0.21mを計る。底面は凹凸がなく、平坦である。堆積土は２層に細分される。

６号小竪穴遺構（第11図・第34図）

全体を調査することができなかったが、概ね4.70m前後の不整形を呈するものと思われる。壁は緩やかな角度で立ち上がり、深さは0.50mを計る。堆積土は６層に細分される。

12号溝状遺構（第11図・第35図）

南北方向に延びる溝で、幅は最大1.00m、深さは0.10m前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは北が高く、南になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は２層に細分される。

13号溝状遺構（第11図・第36図）

南北方向に延びる溝で、幅は最大で2.50m、深さは0.20m前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは北が高く、南になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は２層に細分される。

14号溝状遺構（第11図・第37図）

東西方向に延びる溝で、幅は最大で2.40m、深さは0.30m前後、断面はU字形を呈する。底面レベルは西が高く、東になるにつれて徐々に低くなる。堆積土は３層に細分される。

16号溝状遺構（第11図・第38図）

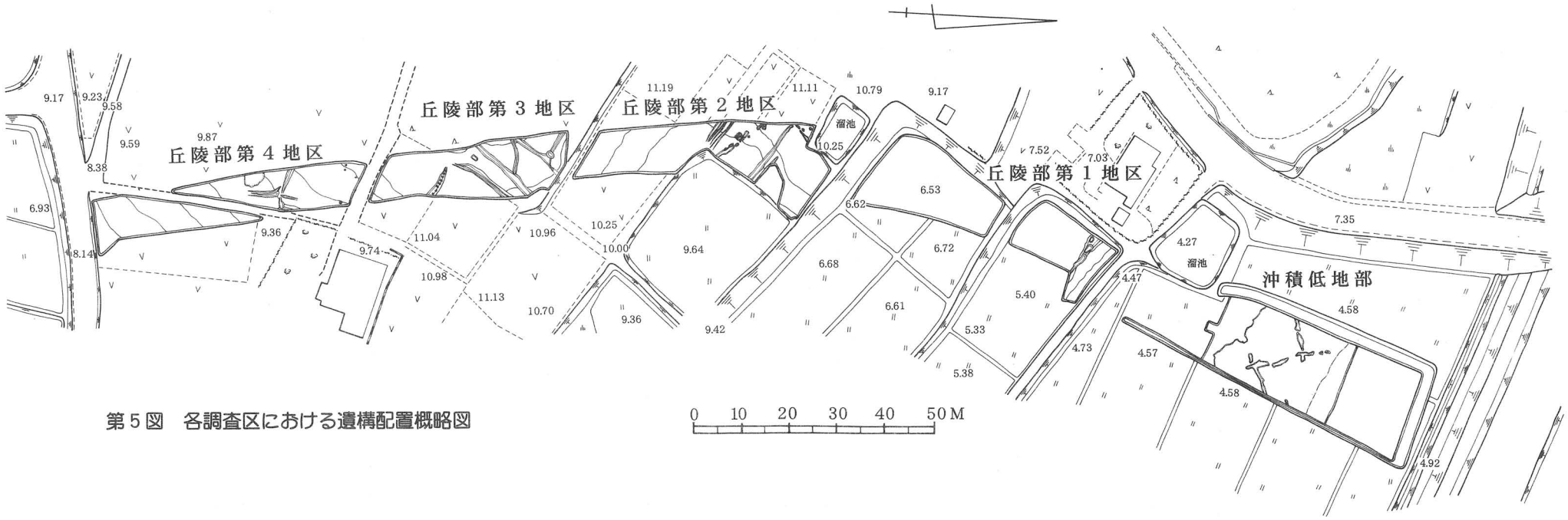
東北方向に延びる溝で、幅は最大2.00m、深さ0.20m前後、断面は皿状を呈する。底面レベルは西が高く、東になるにつれて徐々に低くなり、調査区の東壁下に検出された南北方向に走る溝と連結するが、両者には新旧関係は認められなかった。堆積土は２層に細分される。

6．まとめ

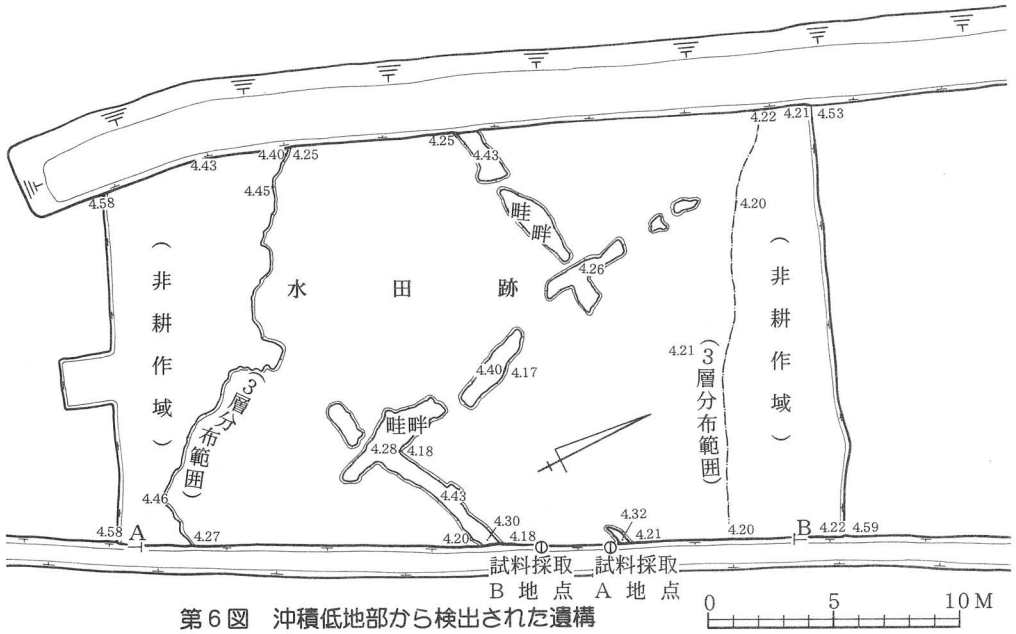
沖積低地部の３層上面で検出された水田跡は、南北の幅20.0m以内、丘陵下の縁辺に限定して経営された小規模なものであり、その年代も特定するには至らなかった。

丘陵部から検出された小竪穴遺構に関しては、１号～３号小竪穴遺構は堆積土の状況や混入物を考慮すると、堆肥を造り、貯えておく施設と想定するのが妥当である。年代的には19世紀後半から20世紀前半代と思われる。４号小竪穴遺構は堆積土や出土遺物から、近世墓と考えることができる。六道銭が古寛永だけから構成される点を考慮すれば、17世紀中葉頃を中心とする年代が与えられる。５号小竪穴遺構は性格、年代とも不明である。６号小竪穴遺は形状や堆積土の状況から風倒木痕として差し支えない。

溝状遺構については、検出された位置や形状、溝の延びる方向、さらに堆積土の状況から１号、２号、３号、６号、７号、８号、９号、10号A、10号B、12号、13号、14号、15号、16号溝状遺構は用水溝と考えるのが妥当である。但し、中には境界の目印しや、畑などの区画を兼ねて掘り込まれたものもあると考えられる。また、５号溝状遺構は区画を目的とする溝、11号溝状遺構は通路跡と推定される。４号溝状遺構の機能は不明である。なお、これらの溝状遺構の年代については必ずしも特定することはできないが、概ね19世紀から20世紀代のものと位置づけておきたい。



第５図　各調査区における遺構配置概略図

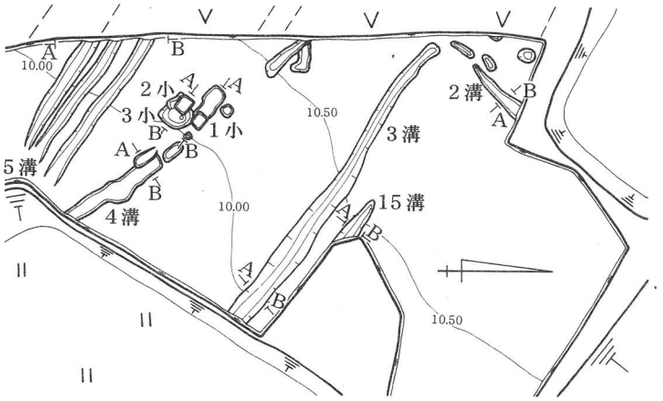


第６図　沖積低地部から検出された遺構

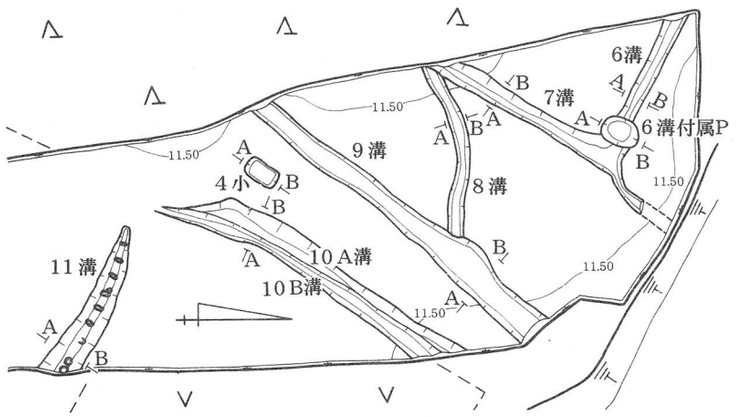
No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐10YR4/2	砂質粘土	やや軟らかく、粘性に富む 酸化鉄を極めて多く含む
2	暗褐7.5YR3/3	粘土	固く、粘性に富む 酸化鉄を多く含む
3	黒褐7.5YR3/2	粘土	固く、粘性に富む 酸化鉄を少量含む
4	灰黄褐10YR4/2	シルト質粘土	軟らかく、粘性に欠ける 酸化鉄を少量含む
5	オリーブ黒5Y3/1	粘土	軟らかく、極めて粘性に富む 酸化鉄を少量含む
6	灰黄褐10YR4/2	シルト質粘土	軟らかく、粘性に欠ける 酸化鉄を少量含む
7	灰黄褐10YR5/2	砂	軟らかく、粘性に欠ける 酸化鉄を多く含む

第７図　沖積低地部から検出された水田跡断面図

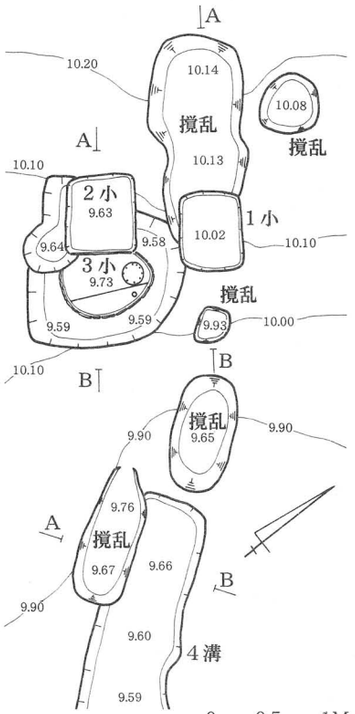
第８図　丘陵部第１地区から検出された遺構



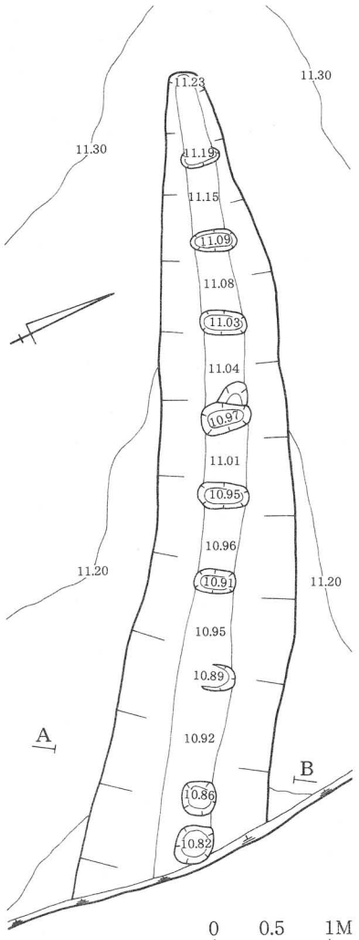
第９図　丘陵部第２地区から検出された遺構　0　5　10M



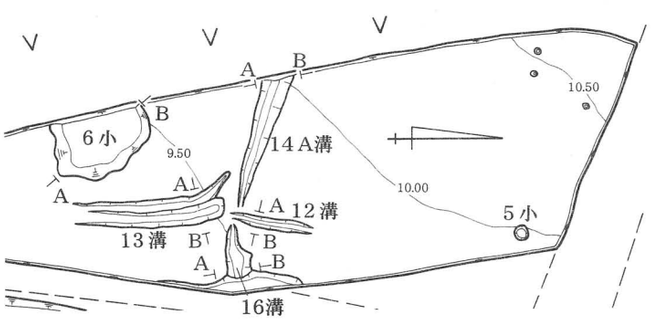
第１０図　丘陵部第３地区から検出された遺構　0　5　10M



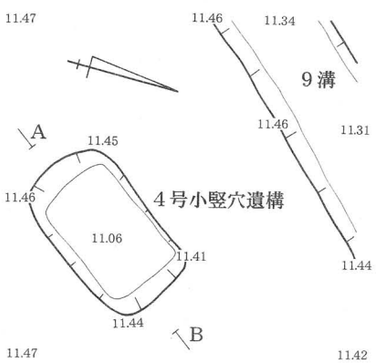
第１２図　丘陵部第２地区　４号溝状遺構
１号・２号・３号小竪穴遺構　0　0.5　1M



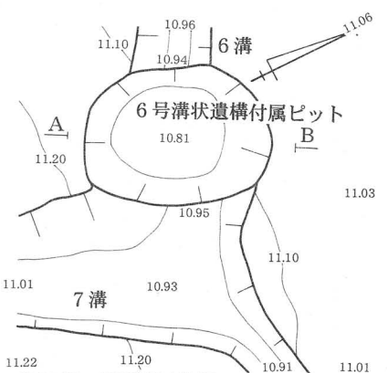
第１４図　丘陵部第３地区
11号溝状遺構　0　0.5　1M



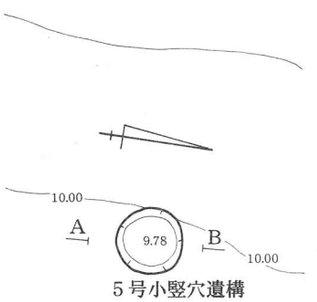
第１１図　丘陵部第４地区から
検出された遺構　0　5　10M



第１３図　丘陵部第３地区　0　0.5　1M
４号小竪穴遺構

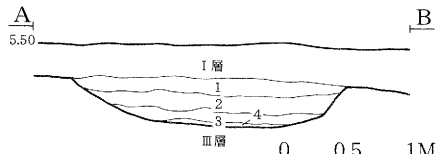


第１５図　丘陵部第３地区　0　0.5　1M
６号溝状遺構付属ピット



第１６図　丘陵部第４地区　0　0.5　1M
５号小竪穴遺構

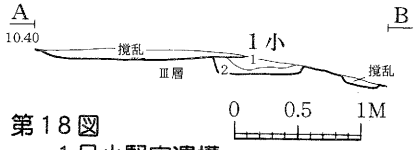
丘陵部第１地区



第17図　１号溝状遺構

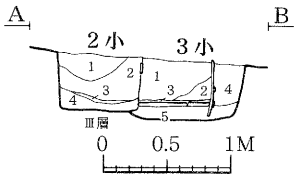
No.	土色	土性	備考
1	黒褐7.5YR3/2	砂質シルト	やや軟らかく、粘性に富む
2	灰黄褐10YR4/2	砂	やや固く、粘性に欠ける
3	黒10YR2/1	砂質シルト	軟らかく、粘性に富む
4	褐灰10YR4/1	砂	固く、粘性に欠ける

丘陵部第２地区



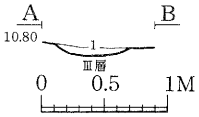
第18図
１号小竪穴遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒褐7.5YR3/2	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける にぶい黄橙10YR6/3砂質粘土をブロック状に含む
2	赤褐10YR3/2	砂質シルト	極めて軟らかく、粘性に富む

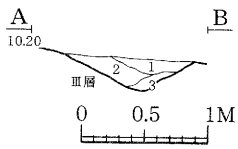


第19図　２号・３号小竪穴遺構

No.	土色	土性	備考
1	極暗褐7.5YR2/3	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
2	黒褐7.5YR3/2	砂質シルト	軟らかく、やや粘性に富む 浅黄2.5YR7/3砂質粘土をブロック状に含む
3	黒5YR1.7/1	シルト	軟らかく、粘性に富む ワラを多量に含む
4	暗褐7.5YR3/3	——	ワラの腐植した層



第20図
２号溝状遺構

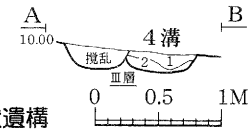


第21図　３号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	暗赤褐5YR3/3	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける にぶい黄橙10YR7/3粘土をブロック状に含む
2	黒褐10YR3/2	砂質シルト	極めて軟らかく、粘性に富む 腐植したワラを多量に含む
3	灰黄褐10YR4/2	砂	軟らかく、粘性に欠ける
4	黒褐10YR3/1	砂質シルト	固く、やや粘性に富む にぶい黄橙10YR7/4粘土をブロック状に含む
5	黒褐10YR2/2	砂質粘土	軟らかく、粘性に富む 緑灰5G6/1砂質粘土をブロック状に含む

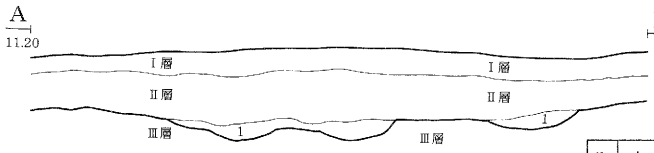
No.	土色	土性	備考
1	黒褐10YR2/3	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
2	黄褐7.5YR3/2	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
3	黄褐10YR5/6	砂質粘土	固く、やや粘性に富む 明黄褐10YR7/6砂質粘土をブロック状に含む

No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐10YR5/3	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける



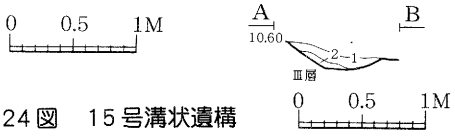
第22図　４号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒褐5YR3/1	砂質シルト	固く、やや粘性に富む 明黄褐10YR6/8砂質粘土を斑点状に含む
2	黒褐7.5YR3/2	砂質シルト	固く、やや粘性に富む 明黄褐10YR6/6砂質粘土を ブロック状に含む



第23図　５号溝状遺構

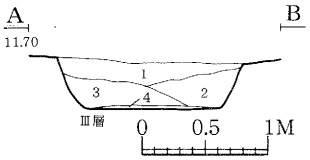
No.	土色	土性	備考
1	黒褐7.5YR3/2	砂質シルト	軟らかく、やや粘性に富む



第24図　15号溝状遺構

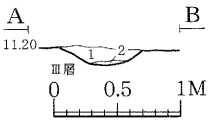
No.	土色	土性	備考
1	明赤褐5YR3/3	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
2	灰褐5YR4/2	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける 明褐7.5YR5/8砂質粘土をブロック状を含む

丘陵部第３地区



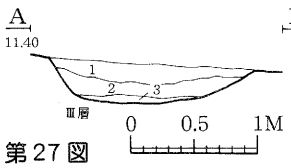
第25図　４号小竪穴遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒褐5YR2/1	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける 黄橙10YR7/8砂質粘土をブロック状に含む
2	黒褐5YR3/1	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
3	暗褐10YR3/3	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける 黄橙10YR7/8砂質粘土をブロック状に含む
4	暗灰黄2.5YR4/2	シルト	固く、極めて粘性に富む



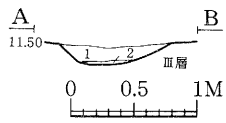
第26図　６号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒褐7.5YR2/2	砂質粘土	軟らかく、粘性に富む
2	黒褐10YR3/2	砂質シルト	軟らかく、やや粘性に富む



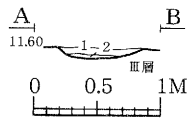
第27図
６号溝状遺構付属ピット

No.	土色	土性	備考
1	黒褐7.5YR2/2	砂質シルト	軟らかく、粘性に富む
2	黒褐7.5YR2/2	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
3	黒褐10YR2/2	砂質粘土	軟らかく、粘性に富む 黄橙10YR7/8砂質粘土をブロック状に含む



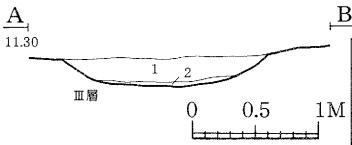
第28図　７号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒褐7.5YR2/2	砂質シルト	軟らかく、粘性に富む
2	暗赤褐5YR3/2	砂	やや固く、粘性に欠ける



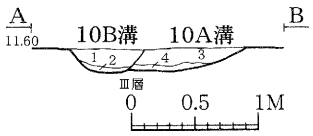
第29図　８号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒褐5YR2/1	砂質シルト	やや固く、粘性に欠ける
2	黒褐7.5YR3/1	砂	やや固く、粘性に欠ける 黄橙7.5YR7/8砂質粘土をブロック状に含む



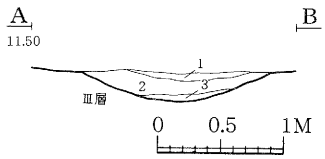
第30図　９号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒褐5YR2/1	砂質シルト	やや固く、粘性に欠ける 黄橙7.5YR7/8砂質粘土をブロック状に含む
2	黒褐7.5YR3/1	砂	やや固く、粘性に欠ける 黄橙7.5YR7/8砂質粘土をブロック状に含む



第31図
１０号Ａ・１０号Ｂ溝状遺構

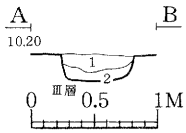
No.	土色	土性	備考
1	暗褐10YR3/3	砂質シルト	軟らかく、やや粘性に富む　10号A溝状遺構堆積土
2	黒褐7.5YR3/1	砂	軟らかく、粘性に欠ける　10号A溝状遺構堆積土
3	褐10YR4/4	砂質シルト	軟らかく、やや粘性に富む　10号B溝状遺構堆積土
4	明黄褐10YR7/6	シルト質砂	軟らかく、粘性に欠ける　10号B溝状遺構堆積土



第32図　１１号溝状遺構

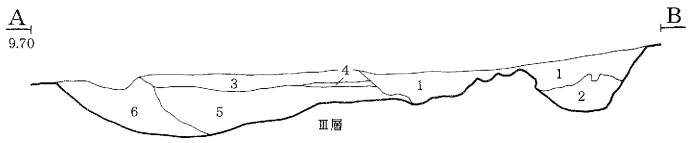
No.	土色	土性	備考
1	暗褐10YR3/3	砂	やや固く、粘性に欠ける
2	暗褐7.5YR3/4	砂質シルト	やや固く、粘性に欠ける
3	褐7.5YR5/3	砂質粘土	固く、粘性に欠ける 明黄褐10YR7/6粘土をブロック状に含む

丘陵部第４地区

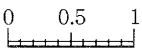


第３３図　５号小竪穴遺構

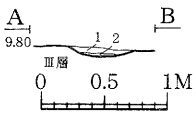
No.	土色	土性	備考
1	褐10YR4/6	砂質シルト	固く、粘性に欠ける
2	黒褐5YR2/1	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける



第３４図　６号小竪穴遺構

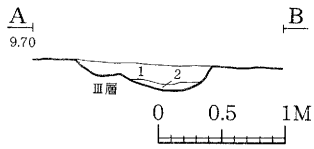


No.	土色	土性	備考
1	黒褐10YR3/2	砂質粘土	軟らかく、やや粘性に富む
2	黄2.5YR7/8	砂質粘土	軟らかく、やや粘性に富む
3	明黄褐2.5Y6/6	砂質粘土	軟らかく、粘性に富む
4	褐10YR4/4	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
5	にぶい黄橙10YR7/4	砂質粘土	軟らかく、粘性に富む
6	黒褐10YR2/3	砂質シルト	軟らかく、粘性に富む



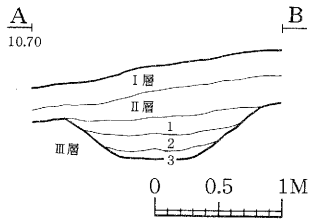
第３５図　１２号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	灰褐7.5YR4/2	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
2	明灰黄2.5YR4/2	砂	軟らかく、粘性に欠ける



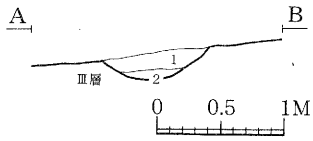
第３６図　１３号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒褐10YR2/3	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
2	黒褐7.5YR3/2	シルト砂質	軟らかく、粘性に欠ける



第３７図　１４号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒7.5YR2/1	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
2	黒10ＹＲ2/1	砂質シルト	軟らかく、粘性に欠ける
3	褐7.5YR4/6	砂質シルト	固く、粘性に欠ける



第３８図　１６号溝状遺構

No.	土色	土性	備考
1	黒7.5YR2/1	砂質シルト	軟らかく、粘性に富む
2	黒褐7.5YR2/2	砂	軟らかく、粘性に富む

（付篇）泉谷遺跡におけるプラント・オパール分析

古　環　境　研　究　所
埼玉県大宮市土屋1795-24

1．はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、泉谷遺跡における稲作跡の検証および探査を試みたものである。以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

2．試　　料

1989年９月13日に現地調査を行った。調査地点は、今回の発掘調査の北端に位置する沖積低地部（現水田域）東トレンチ西壁のＡ、Ｂ地点である。調査区の土層は、１層～５層に分層された。このうち、２層および３層では土層断面の観察によって畦畔状の盛り上がりが確認され、水田跡の可能性が考えられていた。

試料は、Ａ地点では１層～５層について、Ｂ地点では１層～２層について、各層ごとに５～10cm間隔で採取した。採取用具は、容量50cm³の採土管などを用いた。図１に、調査地点の土層断面図と分析試料の採取箇所を示す。試料数は計11点である。

3．分 析 法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1)　試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定

(2)　試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02ｇ）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

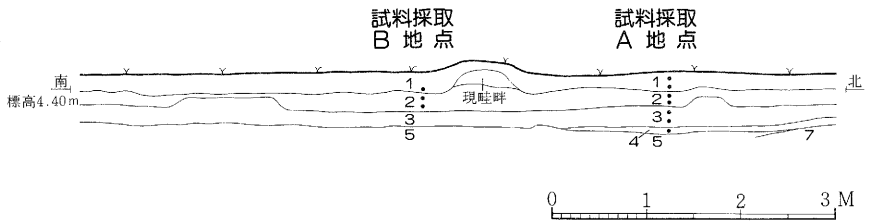


図１　沖積低地部（現水田域）東トレンチ西壁の土層断面図と分析試料の採取箇所

(3) 電気炉灰化法による脱有機物処理

(4) 超音波による分散（150W・26KHz・15分間）

(5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

(6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

4．分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図2に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

表1 プラント・オパール分析結果

A地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	（籾総量）t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1－1	0	10	1.20	7,400	9.06	2,700	7,400	0	0
1－2	10	9	1.20	8,200	9.08	900	11,800	900	0
2－1	19	9	1.04	9,500	9.08	1,900	22,000	900	0
2－2	28	8	1.04	3,000	2.55	2,000	20,000	1,000	0
3－1	36	10	1.04	6,400	6.80	2,100	25,800	1,000	0
3－2	46	10	1.04	4,500	4.74	1,800	11,800	0	0
4	56	6	0.92	1,800	0.99	5,400	18,900	1,800	0
5	62	10	0.97	1,900	1.85	7,700	14,500	0	0

B地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	（籾総量）t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1－2	13	13	1.20	3,800	6.03	3,800	4,800	900	0
2－1	26	9	1.04	9,100	8.71	4,000	15,200	2,000	0
2－2	35	9	1.04	3,800	3.62	1,900	13,400	900	0

5．考　察

(1)　稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った（図１参照）。

Ａ地点では、１層～５層について分析を行った。その結果、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、１層（現表土）で検出されたものは現在もしくは最近の水田耕作に由来するものと考えられる。

２層上部および３層上部ではプラント・オパール密度が6,400～9,500個/ｇと高い値であり、明らかなピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

４層および５層では、密度が2,000個/ｇ未満と低い値である。また、上部に高密度の層があることから、これらの層で稲作が行われた可能性は考えられるものの、上層などからの混入の危険性も否定できない。

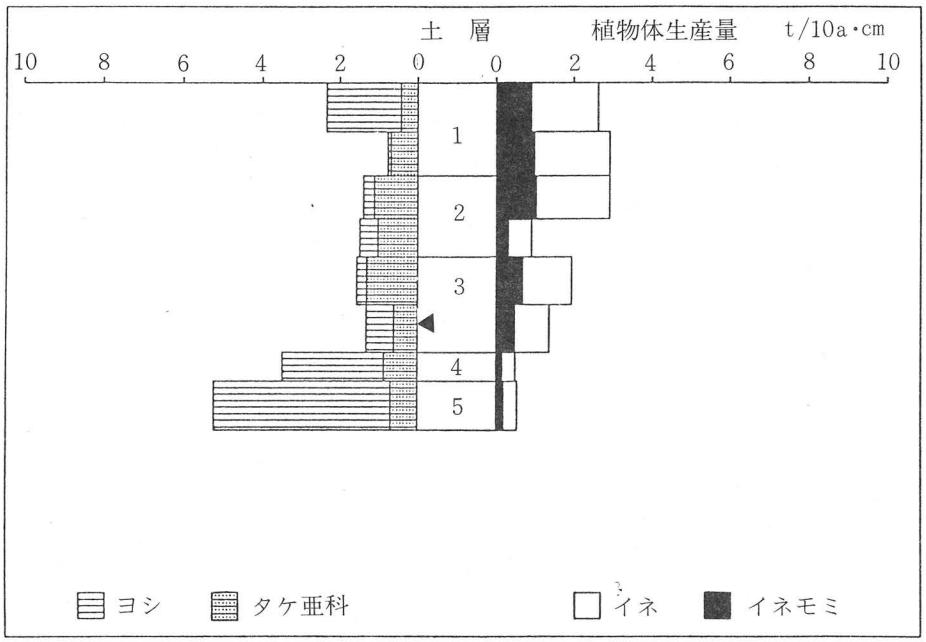
Ｂ地点では、１層下部～２層について分析を行った。その結果、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、２層上部ではプラント・オパール密度が9,100個/ｇと高い値であり、明らかなピークが認められた。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

以上のように、畦畔状の盛り上がりが確認されていた２層および３層では、いずれも稲作の可能性が高いと判断された。

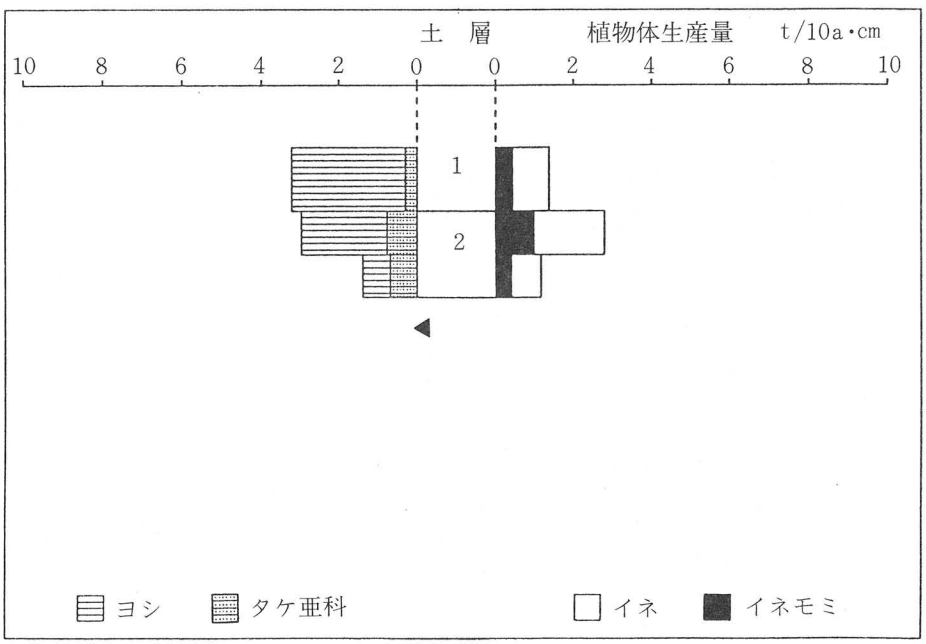
(2)　稲籾の生産量の推定

稲作の可能性が高いと判断された２層および３層について、そこで生産された稲籾の総量を推定した（表１）。その結果、２層では面積10ａあたり平均12.0ｔ、３層では11.5ｔと算出された。当時の稲籾の年間生産量を面積10ａあたり100kgとし、稲わらがすべて水田内に還元されたと仮定すると、これらの層で稲作が営まれた期間は、それぞれ100年間以上と比較的長期間であったものと推定される。

A地点



B地点



（注）◀印は50cmのスケール

図2 おもな植物の推定生産量と変遷

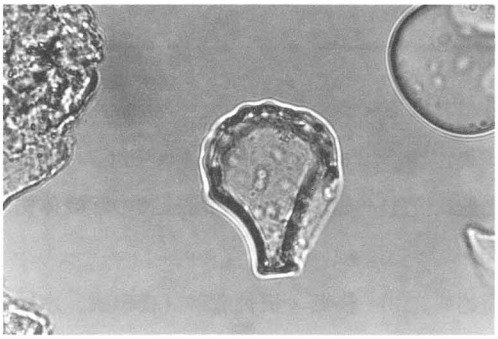
参　考　文　献

杉山真二・藤原宏志．1987．川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山—古環境編—．川口市遺跡調査会報告、第10集、281—298．

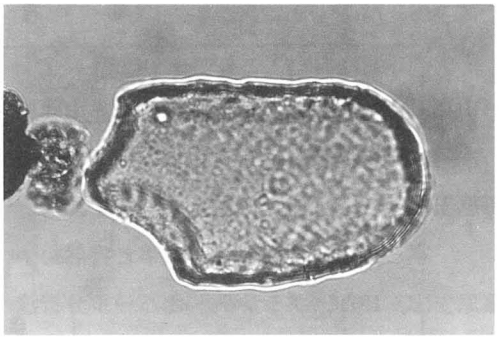
藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然科学、9:15—29．

藤原宏志．1979．プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定—．考古学と自然科学、12:29—41．

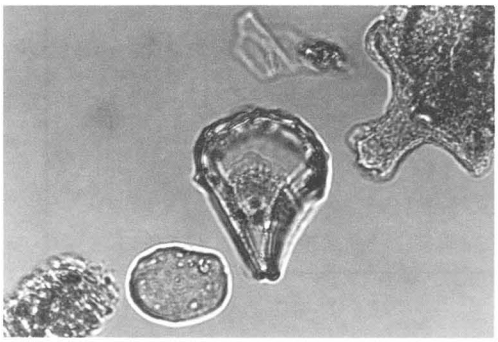
藤原宏志・杉山真二．1984．プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—．考古学と自然科学、17:73—85．



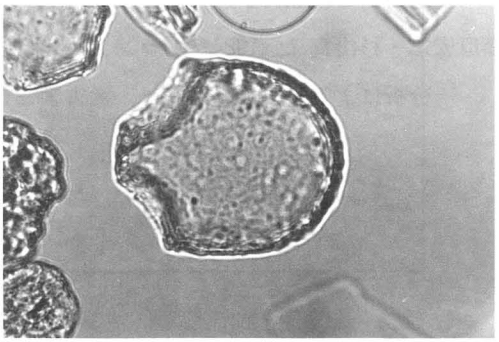
1



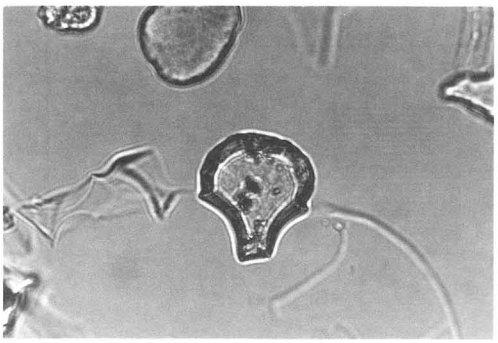
4



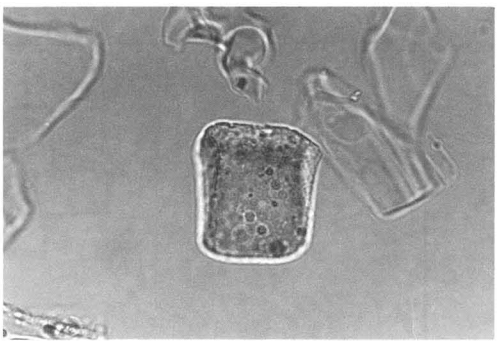
2



5



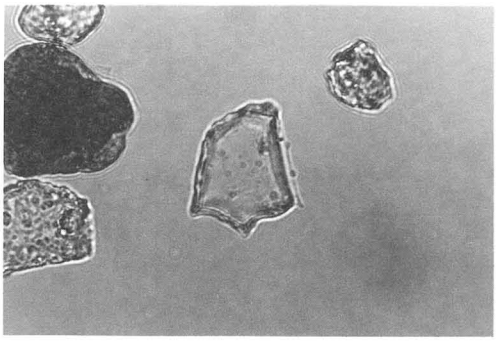
3



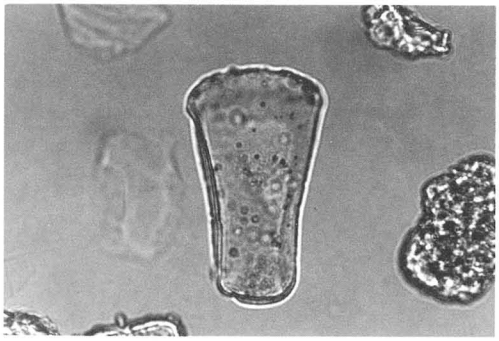
6

プラント・オパールの顕微鏡写真

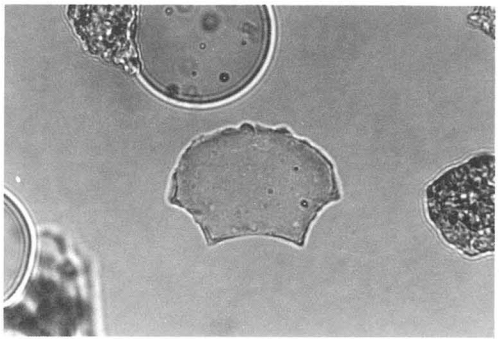
No.	分　類　群	地点	試料名	倍率
1	イネ	A	3－1	400
2	イネ	A	3－1	400
3	イネ	A	5	400
4	ヨシ属	A	3－1	400
5	ヨシ属	A	5	400
6	ウシクサ族	A	3－1	400



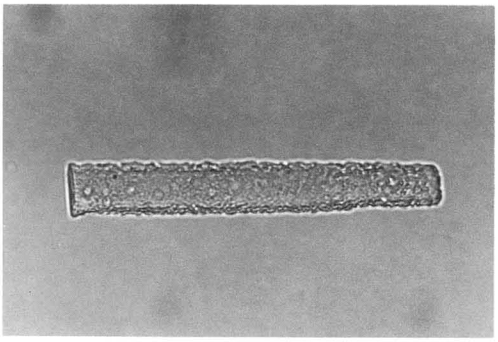
7



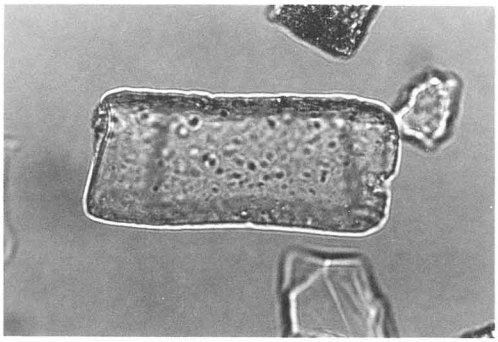
10



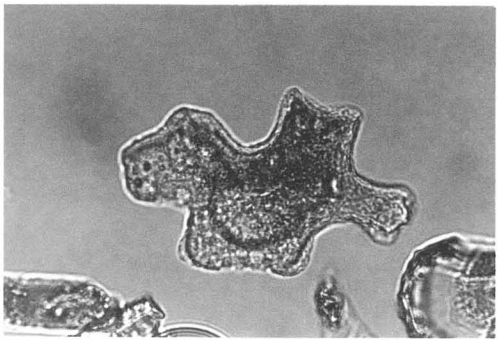
8



11



9



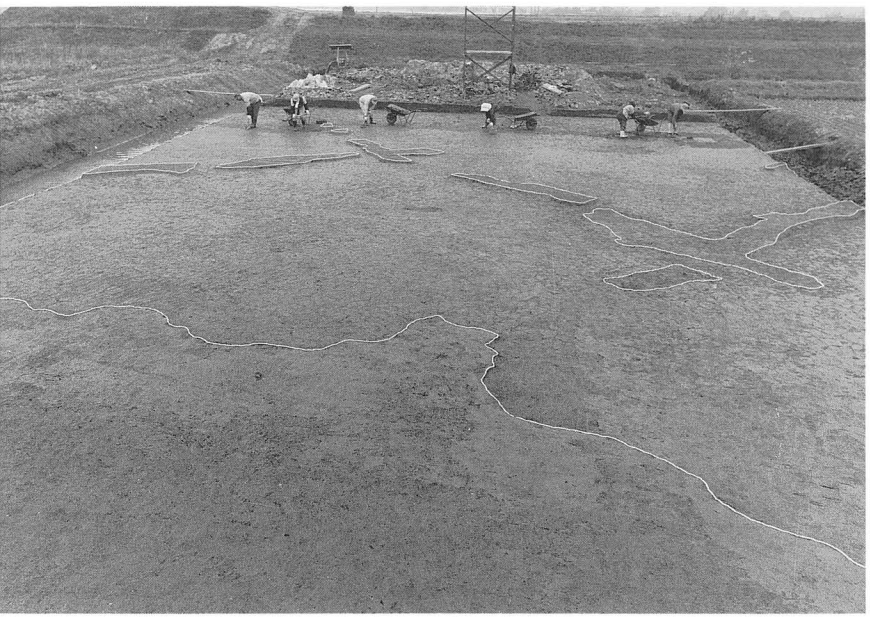
12

プラント・オパールの顕微鏡写真

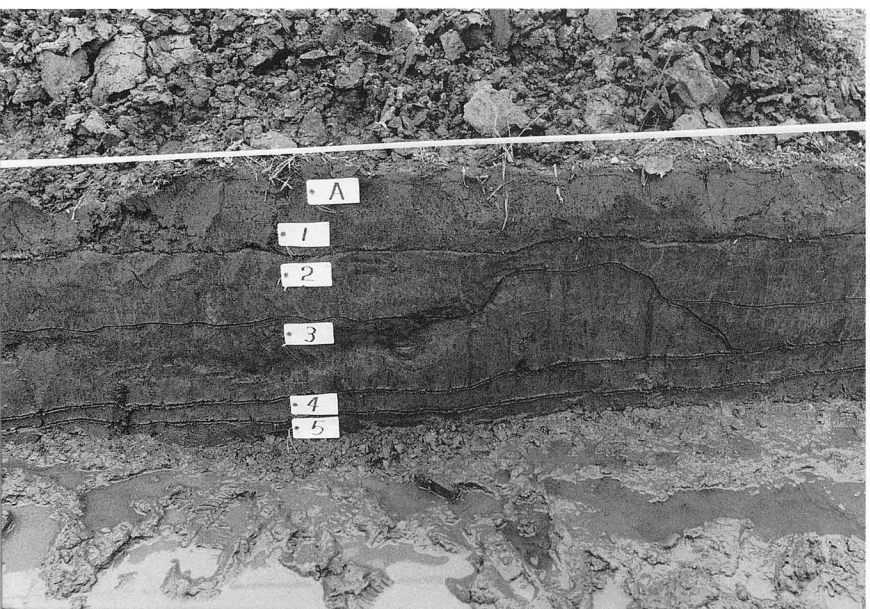
No.	分　類　群	地点	試料名	倍率
7	タケ亜科（クマザサ属）	A	3－1	400
8	タケ亜科（クマザサ属）	A	3－1	400
9	不明（キビ族類似）	A	3－1	400
10	不明	A	3－1	400
11	棒状珪酸体	A	3－1	400
12	樹木起源？	A	3－1	400

図　　版

沖積低地部から検出された
水田遺構（北側から撮影）

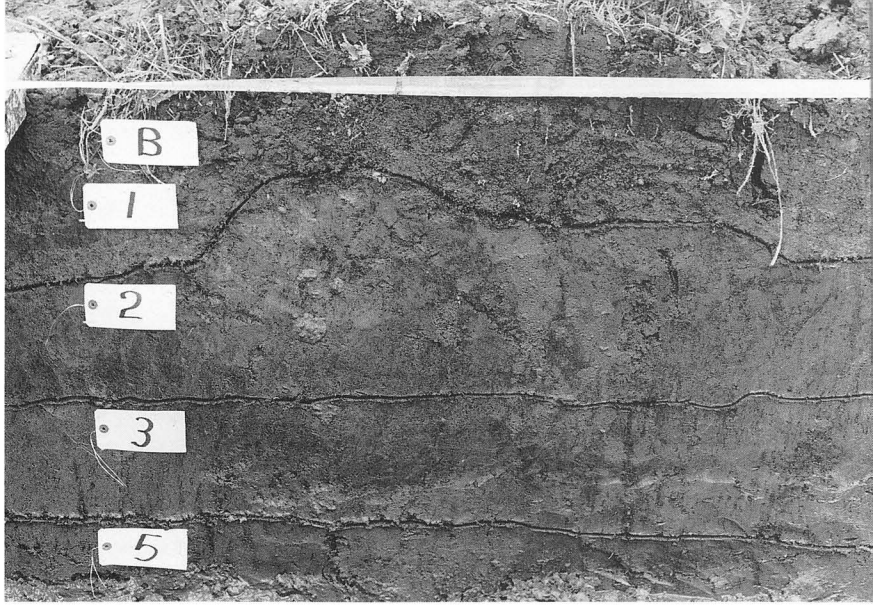


沖積低地部から検出された
水田遺構（南側から撮影）

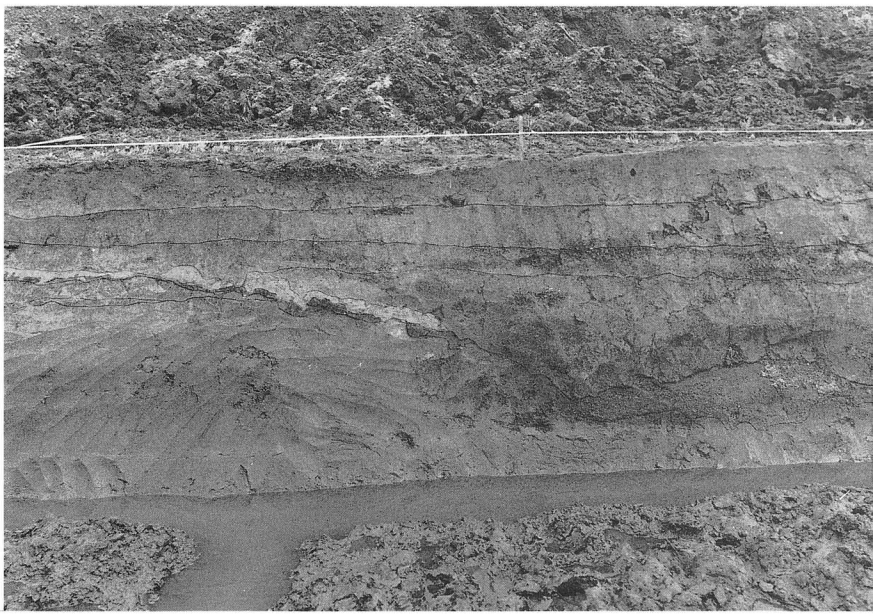


沖積低地部東トレンチ西壁の
プラント・オパール分析試料
採取Ａ地点

図版 1



沖積低地部東トレンチ西壁の
プラント・オパール分析試料
採取Ｂ地点

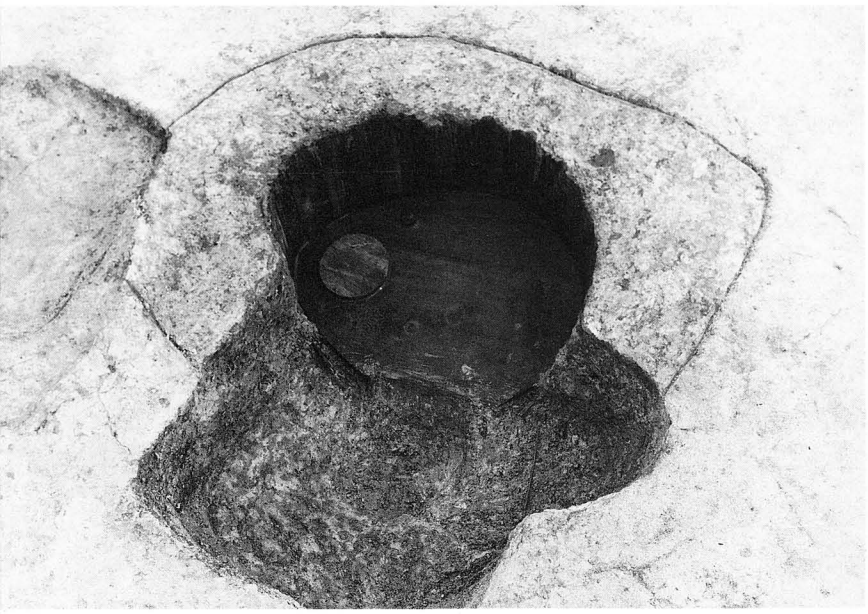


沖積低地部西トレンチ東壁

丘陵部第１地区から検出された
１号溝状遺構（北側から撮影）

図版 2

丘陵部第２地区から検出された
３号・15号溝状遺構

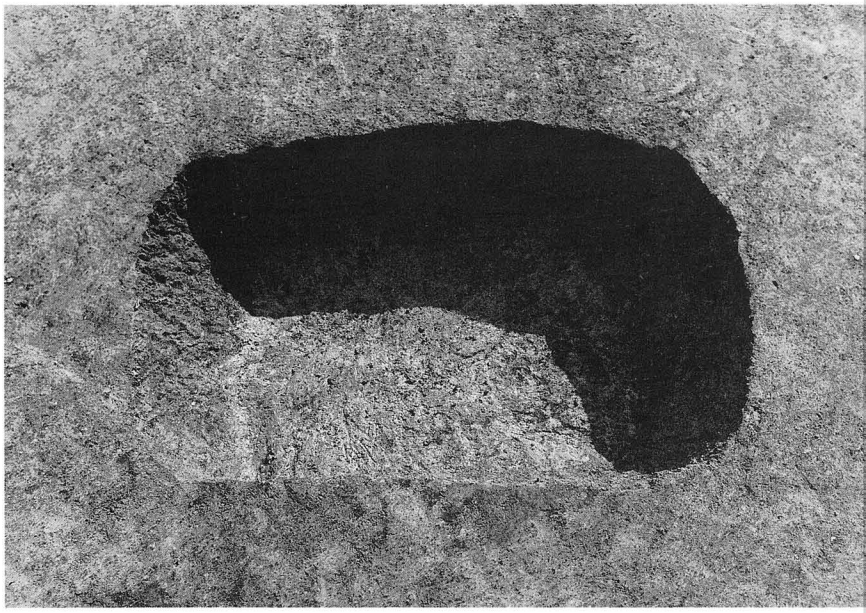


丘陵部第２地区から検出された
２号・３号小竪穴遺構

丘陵部第３地区から検出された
６号･７号･８号･９号溝状遺構

図版 3

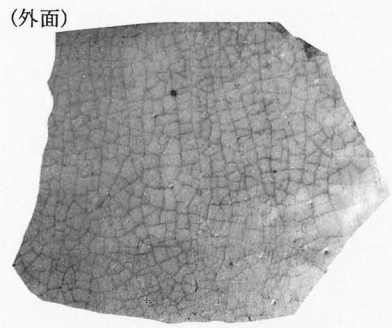
丘陵部第３地区から検出された
11号･10－Ａ号･10－Ｂ号溝状遺構

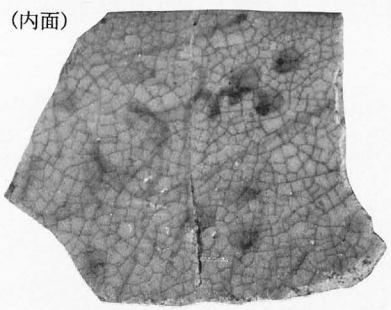


丘陵部第３地区から検出された
４号小竪穴遺構

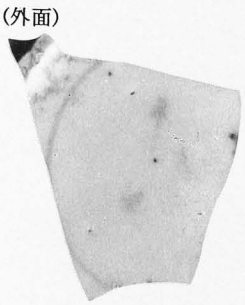
丘陵部第４地区から検出された
12号･13号･14号･16号溝状遺構

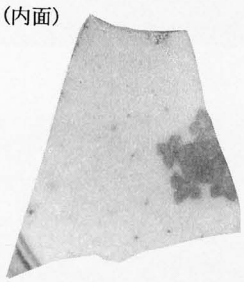
図版 4



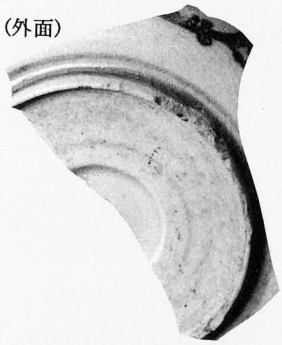


3 溝No.1 （切込・鉢）





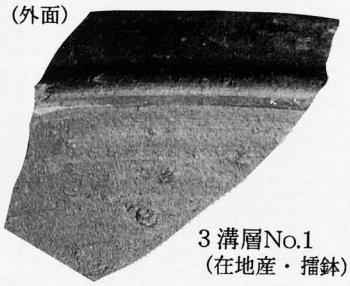
11 溝底面 （肥前・皿）



表採 （肥前・皿）

6 溝付属P底面 （砥石）

9 溝層No.1 （砥石）



3 溝層No.1
（在地産・擂鉢）

2 小層No.1
（磁器・小皿）

10A・10B
堆積土
（磁器・碗）

図版 5

瀬峰町文化財調査報告書　第９集

泉谷遺跡

平成３年３月18日　印刷

平成３年３月20日　発行

発行　瀬峰町教育委員会
〒989-45　宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32-1
ＴＥＬ　0228-38-2172

印刷　南部屋印刷株式会社
〒987-22　宮城県栗原郡築館町高田一丁目7-36
ＴＥＬ　0228-22-2131